

唐代『張仲景傷寒論』の検討

楊 歆

茨城大学大学院人文科学研究科

中国医学古典で傷寒病の『傷寒論』と雑病の『金匱要略』は、それぞれ北宋の1065年と1066年に初めて校定・刊行され、両北宋版に基づく後世の刊本や写本が現在の研究や臨床に使用されている。両書は後漢3世紀の張仲景医書に由来すると考えられているが、北宋版が底本とした写本もそれ以前の写本も一切伝存しない。これゆえ3世紀以降の伝承経緯や内容には疑問が多い。

一方、唐代官吏の王焘は医学全書『外台秘要方』を編纂（752年自序）した。本書はほぼ全体が他医書からの引文で構成され、その多くに出典と所在巻次、同文が見える他医書名を注記する。彼は国家図書館（弘文館）に長年出入して本書を編纂したと自序に述べるので、信頼できるテキストを使用したと考えられる。本書も北宋の校刊を経たが、さいわい南宋版が現存し、『東洋医学善本叢書』に影印収録される。

この『外台秘要方』には『張仲景傷寒論』からの引文が多い。他方、737年の唐令では『張仲景傷寒論』を医師の教科書とし、760年に上奏の医官試験では「張仲景傷寒論二道（問）」と指定する。これらの書は唐政府の校正を当然ながら経ており、『外台秘要方』が引く『張仲景傷寒論』も恐らく同系であろう。ならば『外台秘要方』所引の『張仲景傷寒論』を検討することで、8世紀の仲景医書の古態が窺えるに違いない。そこで王焘および北宋校刊の注記に従い、張仲景関連の引用状況を調査し、以下の結果を得た。なお本調査には森立之重輯の『張仲景方十八卷』（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵自筆本）も参照した。

王焘が出典を仲景の書とし、同時に引用巻次を注記するのは計69条、引用巻次のみ無記は計17条あった。また出典を仲景以外の書とするが、条文末尾に「傷寒論同」と注記するのが45条あった。さらに王焘の注記はないが、北宋校刊の注で「此張仲景傷寒論方」などと記すのが64条あった。以上を王焘注の所在巻次で配列すると、『張仲景傷寒論』は全18巻本で、巻1・9・12・13からと明記する引文はなかった。各引文の内容を検討すると前半10巻が現『傷寒論』とおおよそ対応し、引文巻次の半数以上が現『傷寒論』と一致していた。『張仲景傷寒論』の後半8巻は現『金匱要略』とおおよそ一致し、『金匱要略』全25篇のうち計11篇との対応文があったが、両者の篇順はほとんど一致しない。さらに『金匱要略』で特異な内容の「雜療方」「食禁」の対応文は『張仲景傷寒論』に一切なく、別の『仲景方』や、それを間接引用する『張文仲方』の引文が対応していた。

ところで現『金匱要略』の校刊底本は北宋政府図書館（崇文院）にあった仲景『金匱玉函要略方』3巻で、上巻の傷寒部分は前年に校刊した『傷寒論』と重複するため削除して『金匱要略』を出版していた。この点と『張仲景傷寒論』の後半8巻に現『金匱要略』の「雜療方」「食禁」の対応文が見えない点を併考するなら、次のように推論可能だろう。

現『傷寒論』は、唐政府が校正した『張仲景傷寒論』18巻の前半10巻部分と関連性が高い。他方、現『金匱要略』は唐政府の『張仲景傷寒論』に由来する可能性が低く、別な唐以前の伝本の系統の可能性が高い。ところで北宋政府は『傷寒論』の別伝本『金匱玉函経』も1066年に校刊している。すなわち「金匱」を冠する傷寒内容の書も宋代まで伝承されていた。とするならば宋代以前に傷寒病と雑病の双方を含み、「金匱」を冠する医書があったことも推測している。今後の課題であるが、その書と葛洪の『玉函方』（『金匱要略』）の関連性は追求されるべきであろう。